The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 現場と実習 |
| Author(s) | 仁平, 雅子 |
| Citation | 臨床哲学のメチエ. 1999, 3, p. 21-23 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/5511 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 現場と実習

## ――看護と哲学、二つの領域の「実習」をめぐって――

仁平雅子

一連の「ボランティア実習」に参加してきて、今考えていることをまとめてみたい。なお、その際、筆者が看護大学の教員でもあり医療研究グループのメンバーであること、また、今回の二回のボランティア実習のうち一回目にのみ参加したことの二点を明記しておくことにする。

看護学実習に関連するさまざまの仕事のうち、実習要項の作成というのがある。これは、その実習の目的や目標、そのために実習場でできることを構成立ててまとめようとするもので、各実習ごとに指導にあたる教員群で作成することが多い。これは、表向きには、学生が実習現場で目的を見失わないためのものであり、また、自分の行為や経験を看護という視点から意味づけしていくときの助けとしての、学生の学習目標として扱われる。

一方そこには同時に、それを作成した教員集団の、看護や現場や実習ということについての理解や認識、ひいては臨床能力までもが端的に現れていて、そういう読み方をするのもとても興味深い。実際、私のような駆け出しの教員にとっては、他のメンバーとの共同作業で実習要項の作成プロセスに携わること自体が、非常に有益な実習準備となる。これをしながら、実際の臨床現場で教員としてどのように実習場を組織立てることができそうかについて見通しを持っていく。臨床というのは本来、学生のためにあるのではないから、そこを学習の場としても活用させてもらおうというにはそれなりにしなければならないことがあり、その中には当然、スタッフとの関係作りとか、いろんな意味で学生が安全にその場にいられるようにすることとか、看護学生としての責任とか、物事の優先順位、といったことまで含まれる。

つまりこれらが、教員側からいえば実習環境を整えるというような言い方に含意されたことであり、実習要項をもとに学生との間で予め申し合わせることのできることである。

しかし、事前にどれだけ準備したとしても、実習場での実習指導は結局またそれを乗り越えてしまうようなことになる。とい

うのも、学生ひとりひとりの実習の経験が、実習要項、つまり学習目標の範囲でおさまりのつくものではないからだ。

例を挙げよう。自宅に癌で闘病中の母親を持つ学生が、同じような癌を持つ女性の患者さんを受け持つことになったとして、その経験がとおり一遍のものでなくなるのは想像できるだろうか。あるいは、若い学生たちにとって同年代の女性の妊娠出産をめぐる看護が、何か深く揺さぶられるような経験になることは想像できるだろうか。実習で、要項に書かれたことがくだらなく見えるほどリッチな経験をすることは決して少なくはないのだ。

（テレビの感動ドキュメンタリーで見るような？）「リッチな経験をすること」は、実習目標にはそぐわない。それをねらって出かけるとおかしな実習になるからだ。少なくともケアに関連する実習ではそういえると思う。なぜなら、そういった実習目標の背後に控えるステロタイプなイメージに自分の経験がすいとられて、結局相手も自分も見えずに終わることになるからだ。本当の「リッチな経験」は、相手とそれに看護を通して関わろうとする自分についての、さらには看護というものについてのそういったステロタイプなイメージを捨てたところから生まれてくる。

そして、実習目標にはあげられないにもかかわらず、だからこそ、どの学生も一度でもいいからそういう経験に「出会ってくれたら」、と看護の教員なら思わない人はないだろう。看護における実習とは、こんなあてずっぽうな思い入れをも含めたものである。実習は単に何かの方法や技術の応用・適用というだけではない、という私の主張はこのあたりを根拠としている。

これまで述べたように、実習要項なるものがまかりなりにも存在する看護の領域であっても、学生の経験はそれを凌駕している。このことは別の言い方をすると、「今この人にとって」なにが看護援助になるか、ということは過去のどんな本にも結局載っていないのだ、ということだ。世界中でまだ誰も出会ったことのないケースに今出会っているのだという自覚に立てば、これまで積み上げられてきたことに敬意は払い大いに助けも借りるけど、最後のところでは範に頼ることができない。

私見だが、医療研究グループの堀江氏が、臨床哲学の授業（毎金曜日）での報告の際、自分たちの行ってきた試みに「実習」という言葉を付すかどうかという議論の中で「（実習に参加する姿勢として）無目的であろうとした」と言ったことは、現場の要請してくるそのような側面を表現しようとしたものではないか。ケア・傾聴など、手がかりになりそうなものの助けをとりあえず借りつつ、現場という場での範を持たないあり方へと一気に達しようとするチャレンジだったのではないか。

このことの意味は決して小さくはない。このアプローチは、先に述べた看護の世界で実習要項に表現できないままになっている側面をダイレクトに捕まえようと試みる

ものであり、ある面で、現行の専門職教育にシリアスな反省を促すものと見ることができるからだ。私たちは、この領域で核心的と思われるこのたぐいの事柄について、少なくともまだ実習要項の中にうまく表現できているとは言えない。看護の領域における「実習」という独特のよびならわしかたは、単なる「応用」以外の側面を同時に指し示していた。これらのことが今までどういうわけか漠然としか意識されてこなかったことは、今回認識を新たにしたことの一つである。

さて、「無目的な実習」というこのアプローチは、看護側から見て以上のような面で有意義だったのだが、私たちの中心的な課題である「現場で哲学になにが可能か」ということについてはどうだろうか。第二回目のいわゆる「傾聴実習」が済んだ後になって、日本赤十字看護大学から池川清子氏が来阪したおりに、また、金曜6時限の臨床哲学の授業に参加している看護関係の出席者らから、口をそろえたように「何のための実習だったのか」という質問が出たのは私には大変印象深かった。この時私は、二度の施設訪問に至った経過を質問者に何とか説明することに終始したが、今から考えると、同時に、どうしてそういう質問がされるのかについて、問われた側に十分理解できるように質問者からもっと詳しく話をきくことが大変重要だったと思われる。なぜなら、私自身がまさに同じ質問を自分たちの試みに対してもってきたからであり、私が敢えて「無目的」に現場に行ってみるということを受け入れてきたとすればこの質問について幾ばくかのことがわかればと思ってのことだったと思うからだ。

さらにいえば、自分自身の質問を他者から投げかけられたあの瞬間は、それこそテーマであった聴き聴かれることということの典型が現実化した貴重なチャンスではなかったか、ということも考える。そして結局、実際行ってみてどうだったのか。現場での哲学の意味を探るのだから、これは現場側から教えてもらうしかないだろう。尋ねてみるべきだった。惜しいことをした。もちろん、誰に？どのように？尋ねればいいか、ということは思案のいるところだ。しかし、その方法さえ考えてゆけば、本当に意図は全部捨ててもいいのかもしれないと思う。

（にへいまさこ　博士前期課程）